学校法人
大阪医科薬科大学

真の医療人を育む学びを、持続可能な社会の健康のために

特別×対談

学校法人大阪医科薬科大学に受け継がれる社会貢献の精神

植木　遡ること約1世紀前、大阪医科大学と大阪薬科大学の前身である大阪高等医学専門学校と大阪道修薬学校が実学の府として開設されました。大阪高等医学専門学校を設立した吉津度（よしづわたる）は、設立趣意書で「国際的視野に立った教育研究及び良質な医療の実践を通して至誠仁術の医療人を育成する」という内容を書いておられます。この理念の下に、本学法人では早くから社会貢献活動を重視し、持続可能な社会の発展や地域社会との信頼関係の醸成を行ってきました。

佐野　この国際的視野に立つという精神は、医学部の卒業生である中山太郎元外務大臣の指導で設置された「中山国際医学医療交流センター」の活動にも引き継がれていますね。医療系の教育と研究に携わる医療人や学生の国際交流を目的として1998年に設立されて以来、海外のさまざまな機関との間で活発な国際交流活動を行っています。

植木　今回の大阪医科薬科大学の設立にあたっては、大阪医科大学と大阪薬科大学の双方のマインドを受け継ぎながら、新たに「建学の精神」を「大阪医科薬科大学は、至誠仁術を掲げ、インテグリティある高質の医療人を育成する」と表します。医・薬・看の三学部を有する大阪医科薬科大学は、豊かな人間性を備える優秀な医療人を育成する医療系総合大学を目指すことになります。

学校法人が果たすべき社会的責任とは

佐野　学校法人には高い公共性、自律性と永続性が求められますが、企業と同様に、適切な組織運営を通して経営基盤を万全にするとともに、健全な学校法人運営を維持しながら、USR※を果たさなければなりません。

植木　つまり、自分たちでしっかり経営していかねばならない。本学法人は、まず社会的責任を果たしつつ、社会貢献活動を行います。法人経営の健全な成長、すなわち教育・研究活動の活性化、雇用の維持、パートナーとの安定的取引、地域住民との対話の継続などは、コミュニティへの参画と発展におのずと貢献すると考えるからです。

※University Social Responsibility。大学の社会的責任。

佐野　学校法人が社会的責任を果たすために必要なことは、まず、最も身近なステークホルダーである教職員や学生・生徒が、自分たちの活動や役割をしっかりと認識し理解して活動することです。その活動がもたらす成果や、地域社会と住民への影響、さらに法人経営から派生して生まれる価値など、広い視野で考えながら行動することが求められます。

植木　その通りですね。私たちの活動は、常に多様なステークホルダーの皆さまにご理解をいただかねばなりません。その責務を果たすためには、身近な活動をわかりやすく〝見える化〟する必要があります。〝情報公開〟を通じた多様なステークホルダーとの情報共有〟を目的として2015年から発行している「サステナビリティ活動冊子」はその一環です。今年4月に発行した第3版では、ISO26000とSDGsを融合させて活動をまとめました。約2万部を配布し、本学法人のホームページでも公開しています。

サステナビリティ活動冊子（第3版）

医療系総合大学だからこそできる社会貢献活動

植木　社会的責任を果たすために、学校法人として大切な活動は「社会貢献」です。私たちにできる社会貢献活動は、医療系総合大学・学園のミッションである「教育」「研究」「医療」を通じて行うものだと考えます。すなわち、「教育」によって優秀な医療人を育成・輩出し、「研究」によって新しい治療方法や創薬を行い、「医療」によって未病※の発見、がんなどの治療等の高度先進医療、救急医療・在宅医療を提供する。そして今、社会問題となっている新型コロナウイルス感染症にも対応する。これら多種多様なミッションを達成することこそ、本学法人が行うべき社会貢献活動なのです。

佐野　そうですね。そして私たちは、社会貢献活動から派生する付加価値的な活動や成果として、地域への還元活動も行っています。例えば地域での研修会・訪問看護・ボランティア活動などを地域還元活動と捉えています。今後もさまざまな角度から活動を行っていきたいですね。

※発病には至らないが軽微な症状がある状態。

2年間でキャッチアップしたSDGsへの取り組み

佐野　2015年9月に国連で採択されたSDGsですが、本学法人において具体的な活動を始めたのは2019年夏頃でした。初等中等教育の学習指導要領に道徳性の涵養を目的とするEducation for Sustainable Development（ESD）が導入されており、初等中等教育でESDを受けた若者をどのように高等教育でのSDGsへとつなぐかということで、国連大学のプラットフォームが用意されたと思っています。

植木　この2年間はSDGs推進担当者が関連フォーラムに参加し、他大学や企業の活動をリサーチするなど、SDGsに対する理解に努めてきました。2020年10月からは国連大学SDG大学連携プラットフォーム※に参加し、他大学の優れた活動実績を学びながら本学法人へ

University Information

学校法人 大阪医科薬科大学

EDUCATIONAL FOUNDATION OF OSAKA MEDICAL AND PHARMACEUTICAL UNIVERSITY

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2番7号

URL:https://www.omp.ac.jp/

BNCT（Boron Neutron Capture Therapy、ホウ素中性子捕捉療法）～がん診療領域での近未来の本格展開を目指して～

関西BNCT共同医療センター

2007年から京都大学原子炉実験所（現・京都大学複合原子力科学研究所）と住友重機械工業株式会社との共同研究により開発が始まった医療用の中性子照射装置（BNCT治療システム「NeuCure」）に当初から着目していた本学は、2016年9月に設置プロジェクトを開始、2018年には大学内に「関西BNCT共同医療センター」を設置しました。

現在BNCTの保険適用の対象とすべき疾患は着実に増加しており、2020年6月には、「切除不能な局所進行または局所再発の頭頸部癌」に関してBNCT初の保険診療が開始されました。さらに、大阪医科薬科大学病院の脳神経外科が主導した治験による「再発悪性神経膠腫」（脳腫瘍の一種）も承認申請を準備中で、適応疾患として追加されることを期待しています。また、診療領域のさらなる拡大を目指すべく、2019年8月以降、大学病院と関西BNCT共同医療センターが共同で「再発高悪性度髄膜腫」を対象とした医師主導治験に取り組んでいます。これまで、再発を繰り返した髄膜腫には標準的な治療法が確立されておらず、臨床効果への期待が高まる中、全国から患者さんを迎え順調に治験を進めています。

本学では、20年以上に渡ってBNCTによる脳腫瘍治療の臨床研究を重ね、170以上の症例がデータに残されており、その数は世界一の症例数を誇ります。BNCTによるがん治療のトップランナーとして、BNCTの近未来における本格展開に取り組んでいきます。

関西BNCT共同医療センター

BNCT治療室

「医療」と「教育実践」に「研究」を融合させた新しい「LD治療」のかたち

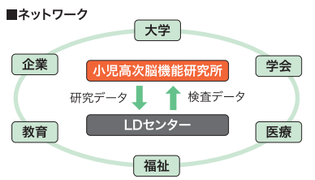
小児高次脳機能研究所/LDセンター/小児科学教室

「LDセンター」では、発達障害児（LD、AD/HD、ASD）の診断手法として、医学的見地から「神経心理学的方法」を用いて評価・分析し、障害児の学習指導に活用してきました。ここでは、学習障害（LD）児に評価・分析に基づいた適切な読み書き指導を行うことにより、自己肯定感が維持され、学校にも適応できることが実証されています。また、言語コミュニケーションに課題を持つ子のコミュニケーション力向上を目的に「幼児教育」を行い学校に適応させてきましたが、これにより、障害のない子と同様に、質の高い発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることができ、初等教育を受ける準備が整います。これらの活動は、SDGs目標4.2「乳幼児発達・ケアおよび就学前教育へのアクセスの確保」を実践するものです。また、LDセンターが企画・開催する研修会・講習会への全国からの参加者は年間8,000名に上ります。2020年度からはWeb講演会も実施し、コロナ禍においても啓発活動を継続しています。また、LDセンターでの実践や講演会で蓄積した知識を集約し、多くの書籍や教材を出版しています。

これらの成果によって、2014年度、2018年度に文部科学省から委託事業「障害のある児童生徒の学習上の支援機器等教材開発」の主要研究機関として開発した「LDの判断と指導のためのスクリーニングキット（LD-SKAIP）」が日本LD学会から公開され、教育現場で活用されています。また、文部科学省からの同委託事業により、「『見る力』を育てるビジョン・アセスメントWAVESデジタル版」を学研と共同開発し、教育や医療の現場で活用されています。

加えて、本活動をさらに活発化させ、多くの人々の期待に応えるために、産業技術総合研究所や海外の研究機関、他大学（藍野大学、東北大学、慶應義塾大学、広島大学）、LD学会などと行っている共同研究を推進するために、2017年8月、小児高次脳機能研究所を開設しました。本研究所における活動を通じて、エビデンスに基づく評価・指導・訓練法などを開発し、普及させることによって教育・医療を中心とした社会貢献につなげています。

■ネットワーク



■主要な研究テーマ

①学童期に至った低出生体重児の学習・認知機能
②読み書き障害の背景要因と指導法
③視機能・視覚認知と学習の関連
④発達性協調運動障害と書字の関連

小児高次脳機能研究所とLDセンター、小児科との関連

■診断・評価用検査

読み能力検査 CARD（スプリングス）

ビジョン・アセスメント WAVES（学研）

iPadアプリ 読み書き検査 LD-SKAIP

■教材・書籍

視覚発達支援 ドリルシリーズ（スプリングス）

視覚発達支援 トレーニングキット（スプリングス）

■資料

- LDセンター来所児データ（約3,000人）
- CARD基準データ（4,193人）
- WAVES基準データ（3,713人）
- LD-SKAIP基準データ（2,472人）

LDセンターの出版物・資料

の水平展開を図っていますが、最も重要なことは私たち大学人が日本で実績のあるＥＳＤを受けた若者を理解するということなのかもしれません。

※2020年に国際連合大学により創設。ＳＤＧｓを軸に、国内の大学の連携を強化し、ステークホルダーとの協働を通して国際社会における日本の大学の存在感を高め、日本および世界の持続可能な発展に貢献することを目指す。

がんの新治療法ＢＮＣＴをはじめとする大学病院ならではのＳＤＧｓ

植木　大阪医科薬科大学の医療・診療分野における社会貢献の中で一番お知らせしたいのは、近年、世界的にもがん治療の新たな選択肢として期待が高まるＢＮＣＴ（ホウ素中性子捕捉療法）です。ＢＮＣＴは原則１回（40分）の中性子照射で治療が可能で、手術は必要なく副作用も少ないという優れた特長を持つ放射線療法です。２０１８年には大学内に「関西ＢＮＣＴ共同医療センター」が竣工。臨床研究や治験を重ね、進行頭頸部がんが２０２０年６月に保険適用となりました。一方の、治験症例数が世界一を誇る再発進行脳腫瘍については、保険適用が承認されるのを待っているところです。ＢＮＣＴは、末期のがん患者さんの生活の質を守るための取り組みにもなります。

病院新本館のイメージパース

佐野　もう１つの社会貢献は、２００１年に開設したＬＤセンターの発達障害児への学習指導の取り組みです。まさにＳＤＧｓの４番目の目標「質の高い教育をみんなに」を推進するものです。その活動を全国に広げるために取り組んでいるＷＥＢ講演会やＬＤ教員の育成のための講習会も特筆すべきものです。

植木　次に、ＳＤＧｓ達成目標年である２０３０年頃、即ち、旧大阪医科大学創立１００周年を迎えた頃には、大阪医科薬科大学病院の新本館が完成予定です。建築デザインにはバイオフィリア※という比較的新しい概念を取り入れていることが特徴で、医療者や患者さんをはじめとする、すべての施設利用者のストレスが軽減される病院を目指しています。このバイオフィリアの概念はＳＤＧｓに通じる部分が大いにありますね。病院の新本館建築プロジェクトは本学で取り組むＳＤＧｓ活動の集大成の象徴（シンボル）になると期待しています。

※アメリカの生物学者ウィルソンによって提唱された「人間は自然と触れ合うことで健康や幸せを得られる」という概念。

佐野　昨今大きな課題となっている女性の勤務環境においても、本学では支援が進んでいますね。法人では２０１８年に「女性医師支援センター」を立ち上げ、女性医師のキャリアをより積極的に支援する取り組みをスタートし、保育拡大や短時間勤務の利用者が徐々に増えており、今後、他職種にも広げていく予定です。

今後のＳＤＧｓ活動４つの取り組み

佐野　大学統合後の新入生にＳＤＧｓを含めた医療人マインドの講義を行いました。医療人あるいは国際社会の一員としてＳＤＧｓに取り組むことの重要性や、17の目標・１６９のターゲットなどについて話したのですが、中学や高校ですでに学習している学生も多く、活発な質疑もあり、今後の活動が楽しみです。

植木　それは頼もしいですね。本学法人としては、次のような取り組みを進めていきます。１つ目は、全学部のカリキュラムにＳＤＧｓを導入すること。２つ目は、研究者やその研究内容をＳＤＧｓに結び付ける仕組みの検討。３つ目は、ＳＤＧｓホームページの開設と関連活動の情報共有の促進。そして４つ目は、２０２１年10月に申請予定の「ＴＨＥ大学インパクトランキング※」への挑戦と、それに伴う本学法人のＳＤＧｓ活動の現状把握と課題分析・改善を図ることです。

佐野　大阪医科薬科大学は、大阪医科大学と大阪薬科大学の統合でよりパワーアップした医療系総合大学として誕生しました。これまで以上に優秀な人材と研究成果を世に送り出していきたいですね。

植木　加えて、将来的には医療技術系の学科の新設計画なども控えています。これらが日本の医療体制の更なる充実につながるよう、今後も社会に貢献していきましょう。

※SDGsの17項目を活用して、大学の社会貢献力をランク付けするもので、2019年から導入されている。